

『 On-line みんなで法華経を学ぼう! 』 vol.21

Dec. 2023

— Let's embark on a journey to discover our own “perspective on the Lotus Sutra”.
(みんなで“法華経観”を見つける旅に出よう)

『妙法蓮華経 如来寿量品第十六 〈前半〉』 (本門・正宗分)

○『又如来の滅度の後に、若し人あって妙法華経の乃至一偈・一句を聞いて一念も随喜せん者

には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』 (法師品 二〇二頁 終五行)

○『其の習学せざる者はこれを曉了すること能わじ』 (方便品 八十二頁 四行)

○「習学」の3つのステップ「聞解・思惟・修習」

(『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たり』 (法師品 二〇九頁三行))

○『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たりと知れ』 (法師品 二〇九頁 三行)

○『十分の一でも実践できれば、いや、その一つにでも徹することができれば、りっぱな精進といえる』 (『新釈法華三部経 第一巻』 P8・8行/P5・1行)

※ 表記 例：(P353・1行/P259・7行) ⇔ (『新釈・文庫版』頁数/『新釈・単行本』頁数)



<從地涌出品の復習>

『止みね、善男子、汝等が此の經を護持せんことを須いじ。所以は何ん、我が娑婆世界に自ら六萬恒河沙等の菩薩摩訶薩あり』 (二五八頁 五行)

・地涌の菩薩とは一 (大衆唱導の首) (P383・6行/P299・6行)

『一一の菩薩皆是れ大衆唱導の首なり』 (二五九頁 三行)

— 地から湧き出した菩薩というのは、～「自ら苦しみや悩みを体験し、そこを突き抜けて来た人」は、本当の力を持っています。そんな人こそ、人を教化する力を具えているのです。～ つまり、この世界はその住人である我々自身の力によって清浄にし、平和にし、我々自身の手で幸福な生活を築き上げなければならないのだ— という教えなのです。

・本化の菩薩は待機の菩薩 (P391・終2行/P306・7行)

久しい前から、悟りを開いていた人たちです。～ 娑婆世界救済への発動に、待機していたわけです。

・実践者として具現する菩薩 (P392・8行/P306・終2行)

大地をメリメリと引き裂いて発来(ほらい)する・・・それは大変な力が必要です。～ 現実社会におけるたくましい実践力を持つ菩薩であることを意味しているのです。

・現実生活の体験あつてこそ (P393・3行/P307・6行)

大地をくぐり抜けるということには、現実社会の生活を体験するという意味があります。

・差別相を通して平等相へ (P394・6行/P308・3行)

- ① はじめ娑婆世界の下の虚空に住していたというのは、つまり「空の悟り」そのものの中にいたということです。「空の悟り」とは、「人間の本性は仏性である」という真実です。
- ② この「現実の人間の差別相を見きわめる」ことが、大地をくぐり抜けることにほかなりません。
- ③ 果たたび「仏性の平等」を観するということであります。差別相を直視することにとどまっていれば、その差別相にとらわれがちになります。もう一度そこを突き抜けて、人間の本性である仏性を見なければなりません。

人間に対する見方を、①本質の『平等相』から、②現実の『差別相』へ、それから再び③差別相を突き抜けた『本質の平等相』へと深めていく筋道(「下方の虚空」⇒「大地」⇒「娑婆世界の虚空」)という過程を象徴させてあるわけです。

『先より盡く娑婆世界の下、此の界の虚空の中に在って住せり。是の諸の菩薩、釋迦牟尼佛の所説の音聲を聞いて下より發來せり』 (二五九頁 一行)

——「わざわざ苦しみを経験する」ということは、非常に大切な過程であって、～ それでなければ本当に娑婆の人間を救う神力は身に付かないのです。

・本化の四大菩薩— (上首唱導の師) (P411・1行/P321・1行)

『一を上行と名け、二を無邊行と名け、三を淨行と名け、四を安立行と名く。是の四菩薩其の衆中に於て最も爲れ上首唱導の師なり』 (二六〇頁 八行)

「上行」(初轉法輪印) — 『至上の法を行するもの』 (仏道無上誓願成)

「無邊行」(与願印) — 『無限の行をするもの』 (法門無尽誓願学)

「淨行」(合掌印) — 『清浄な行をするもの』 (煩惱無数誓願断)

「安立行」(降魔印) — 『確実な行をするもの』 (衆生無辺誓願度)

『是の諸の衆生は世世より已來、常に我が化を受けたり。亦過去の諸佛に於て供養・尊重して諸の善根を種えたり。～即ち皆信受して如來の慧に入りなき』 (二六一頁 七行)

『汝等當に共に一心に精進の鎧を被、堅固の意を發すべし。～疑悔あること得ることなかれ 佛智は思議し叵し 汝今信力を出して忍善の中に住せよ』 (二六五頁 六行)

『亦人・天に依止して住せず』 (二六六頁 終二行)

・人・天に依止せず (P459・4行/P360・1行)

「人」すなわち他人を頼りにすることもなく、「天」すなわち神に頼むこともなく、自分自身をよりどころとし、法(真理)をよりどころとしている信仰姿勢です。

～〈自灯明・法灯明〉の教えであって、千古不易(せんこふえき)の人生訓です。

・《庭野開祖 六つの誓い》

- (1) これからは、けっして嘘はつくまい。
- (2) 力いっぱい働こう。
- (3) 他人の嫌がることを進んでやろう。
- (4) 他人と争わぬこと。どんなひどい目に会っても、神仏のおぼしめしと思って辛抱すること。
- (5) 仕事をするとき、人が見ていようとまいと、陰日向(かげひなた)なくはたらくこと。
- (6) どんなつまらない仕事でも、引き受けた以上は最善を尽くすこと。

『我今實語を説く 汝等一心に信ぜよ 我久遠より 來是れ等の衆を教化せり』 (二六七頁 終行)

父少子老の誓え (P476・終3行/P374・終5行)

『世間の法に染まざる 蓮華の水に在るが如し』 (二七〇頁 七行)

・蓮華の水に在るが如し (P485・5行/P381・8行)

ちょうど蓮の花が泥水に咲いて、しかも清らかで、美しく、いささかの汚(けが)れもないのと同様であるということです。 菩薩の性格をじつに簡潔・適確に表現した名句といえましょう。



<如来寿量品(前半)のあらすじ>

大地から湧き出た無数の大徳の菩薩たちは、釈尊が教化した菩薩であることを伺い、弥勒菩薩ら一同は大変不思議に思い、どうかその真実をお教えてくださいと懇願しました。

【いよいよ《真実》を説くにあたり、聴聞(ちょうもん)する心構えを、釈尊が諭す】——

【二七二頁 一行】すると世尊はそれを受けて、多くの菩薩たちとすべての大衆に向かって仰(おお)せになったのでありました。

『汝等(なんだち) 當(まさ)に如来の誠諦(じょうたい)の言葉を信解(しんげ)すべし』 「これより『如来の真実』を明らかにしましょう。ですから、この『真実の言葉』をしっかりと信じて受け止めて、固く信受するのです」と、『如来の真実』を聞く者の心構えを諭(さと)されたのでした。

釈尊はこの心構えを三度(みたひ)重ねて申し述べられたのでした。

【《真実》を聴受(ちょうじゅ)することの覚悟を、弥勒菩薩が表明】——

【二七二頁 四行】すると釈尊の深いお言葉を聞いた菩薩たち一同は、弥勒(みろく)菩薩を先頭にして合掌して仏さまに申し上げたのでした。

『世尊唯願(ただねが)わくは之(これ)を説きたまえ。我等當(まさ)に佛の語(みこと)を信受(しんじゅ)したてまつるべし』 「世尊よ。どうか『如来の真実』についてお説き下さい。私たちはそのお言葉を心から『信受』します」と決意を込め、世尊に申し上げました。そしてその懇願(こんがん)と決意の言葉を三度(みたひ)繰り返して申し上げたのでした。

【世尊が、いよいよ《真実》『久遠実成』を説く。本仏の『本体』を明かす】——

【二七二頁 終四行】菩薩たちの三度にわたる真剣な願いを目(ま)の当たりした世尊は、菩薩たちが真剣に願っていることを強く感じ取られましたので、静かに口を開かれたのでした。

【二七二頁 終三行】『汝等(なんだち)諦(あきら)かに聽(き)け、如來の秘密神通(ひみつじんづう)の力を』 「皆の者よ。心を清らかにして聞くのです。これより深淵(しんえん)なる『如來の本体』と、計り知れない『如來の不可思議な力』。すなわち『如來の眞實』を解き明かすことにしましょう」

【二七二頁 終二行】「一切の人々や天上界に住んでいる者、そして阿修羅(あしゅら)をはじめとする鬼神などあらゆる者はみな、現在、こうして法を説いている私は、釈迦族の王宮を出て、そしてその後、菩提樹のもとで悟りを開いたものだと思っているのかもしれませんが、善男子よ。実際はそうではないのです。 / 『我實(われじつ)に成佛してより已來(このかた)、無量無邊百千萬億那由他(なゆた)劫なり』 じつは私は、仏に成ってからばかり知れない『永遠の時が経っているのです」

【『久遠実成』という時の長さを譬えて説く】——

【二七三頁 二行】「たとえば、ある人が五百千万億那由他阿僧祇(なゆた あそうぎ)の数に及ぶあらゆる世界(星)に存在する三千大千世界の国々を集めて、それを磨(す)り潰(つぶ)して小さな粉末にしたとしましょう。それを残らず持って東方へ向かい、五百千万億那由他阿僧祇(なゆた あそうぎ)という国(星)を過ぎるたびに、その粉末を一粒ずつ落として行き、最終的にその粉末を落とし尽くしたとしましょう。善男子よ。これを達成するためには、一体どれだけの国々(星)を通り過ぎなければならぬのでしょうか。その無数およぼ国々(星)の数を考え致すことは、とてもできないことでありましょう」

【弥勒菩薩尊らが、『久遠実成』の時の長さをはかり知ることにはできないと答える】——

【二七三頁 六行】すると弥勒(みろく)菩薩をはじめとする菩薩達が、声をそろえて申し上げました。「世尊よ。それはとても計り知れない無数の国々(星)で、まったく私どもの力では考え及ぶことはできません。もし声聞や縁覚などの尊い境地に達した者たちが、迷いをすっかり払い尽くした清らかな智慧をもって数え上げたとしても、決して計り知ることのできない数であります。私どもはその声聞・縁覚よりも修行が進み、不退転の菩薩の境地にいる者ですが、いま世尊が説かれた国々(星)の数については、考え尽くすことができません。世尊が仰(おお)せられる国々の数は、まことに無量無数の国々でございます」

【『久遠実成』の時の長さ、あらゆる世界で法を説き続けていることを明かす。

本仏の『絶対性と無限性』を説く】——

【二七三頁 終三行】すると世尊は大菩薩たちに仰(おお)せられたのでした。

「諸々の善男子よ。今こそはっきりと告げましょう。この通り過ぎたすべての世界(星)をさらに全部まとめて粉末にし、その粉末の一粒一粒を『劫・こう』という時間に置き換えても、私が成仏し今日まで時間というものは、その粉末の数の『劫』よりも、さらに百千万億那由他阿僧祇劫(なゆた あそうぎ こう)も長い時間と年月が経っているのです」

【二七四頁 二行】『我常(われつね)に此の娑婆世界に在(あ)って説法教化す』 「そういう計り知れない無限の過去から、私は常にこの娑婆世界に存在して衆生を教化しています。『亦餘處(またよしよ)の百千萬億那由他阿僧祇(なゆた あそうぎ)の國に於ても衆生を導利(どうり)す』 そればかりでなく、私はこの娑婆世界だけではなく、その他のあらゆる世界に於いても、同様に衆生を導き続けているのです」

【本仏は『久遠実成』の存在であり、あらゆる『方便』を用いて衆生を導く。

本仏の『衆生済度』と、『衆生一人一人の機根を見抜いての方便』を示す——
【二七四頁 三行】「諸々の善男子よ。私は無限の過去から無限の未来まで『生きとおし』の存在です。そして、かつて『序品』でも説いていることですが（『五五頁七行』、／（『是（こ）の中間（ちゅうげん）に於て我然燈佛等（われんとうぶつとう）と説き、又復（またまた）其（そ）れ涅槃（ねはん）に入（い）ると言（い）ひ。是（かく）の如（ごと）きは皆（みな）方便（べんぽん）を以て分別（ぶんべつ）せしなり』）『然燈仏・ねんとうぶつ』など様々な仏が世に出て来て衆生を救ってきましたが、それはほかでもありません。それらの仏は、本仏が衆生を救うために現れたのです。ですから仏が現われることも、そして仏が滅することも、それらはすべて、衆生を教導するための『方便』にすぎないのです」。

【二七四頁 五行】「諸々の善男子よ。もし或る衆生が私の所にやって来たら、私は『仏眼・ぶつげん』をもって／（『諸根（しよこん）の利鈍（りどん）を觀（かん）じて』）その人の機根が高いのか低いのか、その程度のほどを見分けることができます。そしてその人の程度にしたがって、どのようにすれば『仏の悟り』をいち早く得ることができるのかを見極め、導く手段を講じます。ですから私はその人を導くために、これまで様々な違った仏の名を示して導いてきました。また仏の寿命についても様々な違って説いており、仏の寿命に長短があるように説いてきました。／（『亦復（またまた）現（げん）じて當（まさ）に涅槃（ねはん）に入（い）るべしと言（い）ひ』）そして寿命が尽きて入滅しても、ふたたび世に現われて教えを説き、さらにまたこの世を去っていくということについても述べました。／（『又種種（またしゅじゆ）の方便（べんぽん）を以て微妙（みみょう）の法（ぽう）を説いて、能（よ）く衆生（しゆじゆ）をして歡喜（かんぎ）の心を發（おこ）さしめき』）仏は方便を用いて深淵（しんえん）なる『真理の教え』を相手に応じて様々な説き分け、それによって衆生に大きな歡喜を与えて来たのです」

【二七四頁 終五行】「諸々の善男子よ。衆生のなかで声聞や縁覺の境地を求めただけで充分だと考え、そして徳が少なく煩惱が多い者に対しては、その者が分かり易いように『仏は若い時に出家し、これこれ修行をした結果、仏の悟りを得ることができた』ことを伝え、私自身のように行えば仏になれるのだと説き示したのでした」

【二七四頁 終三行】（『然（しか）るに我實（われじつ）に成佛（ぶつじゆ）してより已來（このかた）、久遠（きうえん）なること斯（かく）の若（ごと）し』）「しかし実際に成仏したのは『久遠の過去』であることは、さきほど説いた通りです。『久遠実成』の存在なのです。ただ、方便として『私は今世、若い時に出家し、そして仏と成った』と説いたのでした」

【『六或示現（ろくわくじげん）』をもって、本仏は衆生を導く】——

【二七四頁 終行】「諸々の善男子よ。私が説く教えには表現の違いがあっても、それは全ての衆生を救うために違いがあるのです。そのためには、／（『或（ある）いは己身（こしん）を説き、或（ある）いは他身（たしん）を説き』）**①**ある時は仏の本体そのもの（『己身・こしん/法身仏・ほっしんぶつ』）について説くこともあれば、そうではなく**②**他の特定の姿として現れる仏（『他身・たしん/報身仏・ほうしんぶつ』）について説くこともあります。／（『或（ある）いは己身（こしん）を示し、或（ある）いは他身（たしん）を示し』）**③**またある時は、仏の身（『己身・こしん/応身仏・おびんぶつ』）として現れることもあれ

ば、④その他の様々な聖人・賢人(【他身・たしん/【仏以外の姿】)として出現することもあります。／『或(あるい)は己事(こじ)を示し、或(あるい)は他事(たじ)を示す』 ⑤そしてまたある時は、仏の大慈大悲の救いのそのままの相(すがた)(【己事・こじ】)をあらわすこともあれば、⑥時にはその人にとって試練となる形(【他事・たじ】)となって救いの手を差し伸べることもあります。／『諸(もろもろ)の言説(ごんぜつ)する所は皆實(みなじつ)にして虚(むな)しからず』 仏の説き示すところは全て『真実』であり、一つとして無駄なものはないのです」

—— 【『六或示現(ろくわくじげん)』】

【本仏が見る『現象世界』の真実について】——

【二七五頁 三行】「なぜのこのように仏は形を違えて現象を現わし、説き示すことができるのかといえば、それは、仏は現象世界の全てを『ありのままに見通し』、全ての物事の『実相』を見極めているからにほかなりません。すべての現象は発生し、変化し、消滅していくものなのですが、それは目に見える現象のうえだけのことであって、如来の眼をもってすべての実相を見ると、／『生死(しょうじ)の若(も)しは退(たい)、若しは出(しゅつ)あることなく』 すべてはその存在自体が『在る・無い』という存在ではなく、ただ『空』であり、つまりはすべては『縁起』の法則によって成り立って存在しているものなのであります。その意味ではすべての存在は、『本質においては平等』な存在なのであります。

【二七五頁 五行】『實(じつ)に非(あら)ず、虚(こ)に非(あら)ず』「目の前の現象が『在る』(実)と見るのも間違いであれば、『無い』(虚・こ)と見るのも間違いです。／『如(にょ)に非(あら)ず、異(い)に非(あら)ず』 また、物事がいつも存在して変わることのない『常住する』(如)と見るのも間違いであり、だからといって『常住のものはない』(異)と断定するのも間違いです。つまり『不変の状態ばかりで見るのも間違い』であり逆に『変化する状態ばかりみるのも間違った見方』であるのです。如来は、現象世界(『三界』－ 欲界・色界・無色界)に住んでいる人間の見方を超えて、すべての物事の本質、『実相』を見極めているのです」

【本仏の救護は『永遠』に行なわれ続けている】——

【二七五頁 六行】「このように如来は『実相』を明らかに見極めているために、決して見誤るといことがありません。ところが衆生はそれぞれが持つ様々な性質・欲望・行動・思想・利書を前面に打ち出して『自分のものさし』で物事を見てしまい、その結果、苦を生んでしまうのです。／『諸(もろもろ)の善根(ぜんこん)を生ぜしめんと欲して、若干(そこばく)の因縁・譬論・言辞(ごんじ)を以て種種に法を説く』) それゆえ如来は、衆生を完成された人として大本から徹底的に向上させ、人格を高めさせるために、『過去の体験・譬え・理論』を様々に説き分けて教化していくのです。／『所作(しよき)の佛事(ぶつじ)未(いま)だ曾(かつ)て暫(しばら)くも廢せず』) そしてその教化はこれまでに『一度も休まず』に行い続けているのです」

【二七五頁 終四行】「仏は無限の過去から仏であり、また寿命も無量阿僧祇劫(あそうぎこう)という無限であります。そして仏は常にこの世に住していて、『滅する』ということはありません」

【二七五頁 終三行】「諸々の善男子よ。私が前世において菩薩道を行じたために、その功德によって寿命は大変長いものとなり、なかなか尽きるものではありません」

【仏の『滅度』の真の理由】——

【二七五頁 終二行】ところが私は皆さんに対して『私は、あと少しでこの世を去るであろう』と言いました。／（『然(しか)るに今實(いまじつ)の滅度に非(あらざ)れども』) しかしこれは本当に滅するのではなく。／（『如来是(こ)の方便を以て衆生を教化す』) それは衆生を教化する『方便』として、みんなの前から姿を消すことの宣言なのです」

【二七六頁 一四行】「なぜこのような宣言をするのかと言え、私がいつまでもみんなの前にいるということになれば、安易な心が生じてしまいます。／（『薄徳(はくとく)の人は善根(ぜんこん)を種(う)えず』) そのうえ 徳の薄い人は良い行いをする事ができず、自らを高めようとするをやらなくなります。／（『五欲(ごよく)に貪著(とんじゃく)し、憶想妄見(おくそうもうけん)の網の中に入(い)りなん』) そして自らを高めることがないために、結果的に五感の欲にとらわれて、『自己本位のものの見方・考え方の網』の中が**がんじがらめになり、正しい生き方ができなくなる**からです。私がいつまでも生きていてこの世を去ることがなければ、人々は、教えは『聞きたい時だけ聞けばよい』というわがままな心になり、その結果、怠け、仏の教えに触れることが貴重であるということに気づかず、ついには仏を敬わず、教えを聞こうという『真剣な心』を起さなくなります」

【二七六頁 四行】「そのために如来は、『仏が世に現われることに巡り会うことは、非常に難しいのだ』ということ、『方便』を以って説くのです。なぜ難しいのかといえ、徳の薄い人は無量百千萬億劫という果てしない時を経て、やっと仏に巡り会える人もいれば、まったく巡り会うことができない人もいます。ですから私は『比丘たちよ。仏を見ることは大変難しいのである』と説いているのです」

【二七六頁 終六行】「ですから、仏に巡り会うことが難しいとわかれば、／（『心に恋慕(れんぼ)を懐(い)だき、佛を渴仰(かつごう)して便(すなわ)ち善根(ぜんこん)を種(う)ゆべし』) ひとりだに仏を慕(した)う心を抱(いだ)くようになり、喉(のど)が渴(かわ)いた者が水を求めるように、仏を求めるようになります。そうすれば自然と善い行いを実践し、自らを高める心を起こすようになるわけです」

【二七六頁 終四行】「ですから、如来は実際には滅度しない『生き通しの存在』でありながら、方便としてこの世から姿を消すのだと説くのです。善男子よ。それは私一人だけではありません。すべての仏も同じように説くのです。それは衆生を救うために行うものであって、嘘ではなく、空しいことはない真実なのです」

【仏の『滅度』の真の理由を『警え』をもって説く】——

《良医治子(らういじ)の警え》——

【二七六頁 終二行】世尊はこのことを警え話で説かれました。

「あるところに優(すぐ)れた医者がいました。その医者はあらゆる薬の処方(しょほう)を極めており、どんな病気も治す名医でした。その医師にはたくさんの子どもがいました。十人、二十人、いや百人もいました。ある時、用事ができて他国へ出かけることになりました。しかしその留守中、なんと子どもたちは誤って毒を飲んでしまったのです。父親がそばにいたならばそのようなことは起きなかったのですが、子どもたちは父親がいないことをいいことに、好き放題ふ

るまい、誤って毒を飲んでしまったのでした。毒薬は徐々に体にまわり、子どもたちは皆苦しみ、地べたをころげまわって苦しみました」

【二七七頁 二行】「そこに医師である父が帰ってきました。子どもたちは皆、父の帰りを喜びました。しかし子どもの中には、毒のために正気をなくしている者もいれば、それほど毒のまわっていない子もいました。それでも子どもたちは、遠くから父の姿を見つけると一様に喜び、父の前に跪(ひざまず)いて懇願(こんがん)するのです。『お父さん。よく帰って来てくださいました。私たちは愚かにも、誤って毒を飲んでしまいました。どうか治療して命を助けてください』と頼んだのでした」

【二七七頁 五行】「父は苦しむ子どもたちを見て、『これは直ぐに助けなければならない』と思い、薬を調合して一番よく効く薬を処方しました。その薬は美味しく飲み易(やす)く、色も香りも味も素晴らしい薬でした。そして子どもたちに与えて『この薬は大変よく効く薬で、色も香りも味も良い。さあ、飲みなさい』

【二七七頁 終四行】(『速(すみ)かに苦悩を除いて復(また)衆(もろもろ)の患(うれ)えなげんと』) 『しかも今の苦しみがいっぺんで治る薬だよ。そればかりか、これから先、もう二度と苦しまず、どんな病気もしなくなる薬だよ』と差し出してくれました」

【二七七頁 終四行】「子どもたちの中には正気を失っていない子もいて、その子らは良薬の色・香りの良さにひかれて、素直に薬を飲みました。すると苦しみはすっかり消え、治ってしまいました。しかし正気をなくしている子どもたちは、与えられた薬をどうしても飲もうとしませんでした。なぜかと言えば、体が毒気で深く侵されているために、正気を失い、色も香りも味も良い薬なのに、それがひどい色で、不快な香り、味も悪くてまずいと勝手に思い込んで、飲む気になれないでいたためです」

【二七八頁 二行】「そうした薬を飲まない、正気を失った子らを見た父は、次のように思いました。／(『此の子態(あわれ)むべし』)『ああ可哀そうに、この子たちは、毒のために正気をなくしている。心か顛倒(てんどう)しているのだ。私に会ってあんなに喜び、そして『助けてくれ!』と頼んでいながら、薬を飲まないでいる。このままだと子どもたちが危ない。よし。この子らが必ず薬を飲む方法を取ろう』と思い、子どもたちにつきのように語りかけたのでした」

【二七八頁 五行】『子どもたちよ、よく聞きなさい。私はもう年をとってあまり先がない。それなのにまた用事ができたために出かけなければならない。それで、ここに一番良く効く薬を置いておくから、ちゃんと飲むのですよ。心配することはないよ』と言って他国へ出かけました」

【二七八頁 七行】「そしてしばらく経つと、旅先から父の使いがやって来ました。そしてこう告げたのでした『父上はお亡くなりになりました』と。その悲しい知らせを聞いて、子どもたちは大変悲しみ、もう頼る人はいなくなったと、心細くなりました。そして『お父さんがいてくれたならば、きっと私たちを可哀想(かわいそう)だと思って助けて下さるに違いない。でも、お父さんはこの世からいなくなった』と嘆(なげ)き悲しんだのでした。そして他に頼る人がいない。どうすればいいのだという心細い思いがヒシヒシと胸に込み上げてきたのでした」

【二七八頁 終三行】『常に悲感(ひかん)を懐(いだ)いて心迷(こころづい)に醒悟(しょうご)し』「すると、その悲しみと不安のおかげで、毒のために顛倒(てんどう)していた心がハッと目を覚まし、父が残してくれた『薬』はまずいものではなく、色も香りも味も良いことに気付きました。そして早速(さっそく)服用しました。すると毒はすっかり消え、病気も治ってしまいました。そして子どもたちが治ると、それを見計ったように父は他国から帰ってきて、子どもたちの前に姿を見せたのです」
「私が『仏の滅度』を説くのは、これと同じ意味なのです」

—— << 良医治子(らいいじ)の譬え >>

【仏の<< 良医治子(らいいじ) >>の譬えを、かみ締める】——

【二七九頁 一行】「諸々の善男子よ、どう思いますか？ この医師は、用もないのに再び他の国へ行き、死んでもいないのに『死んだ』と言って嘘の知らせを子どもたちにしたのは、子どもをだます行為だったのでしょか。しかもそのことを非難できるでしょか？」

【二七九頁 二行】すると一同は答えました。／(不也(いななり)、世尊)「いいえ世尊。そういう非難はできません」と。

【二七九頁 三行】釈尊は言葉を続けられました。「そうなのです。実は私はこの医師のようなものです。／(成佛してより已來(このかた)、無量無邊百千萬億那由他阿僧祇劫(なゆたあそうぎこう)なり) 私は無量無邊百千万億那由他阿僧祇劫(なゆたあそうぎこう)という『無限の過去から永遠の未来まで、ずっと仏である』のですが、／(衆生の爲の故(ゆえ)に方便力を以て當(まき)に滅度すべしと言う) 衆生を救う『方便』として、『もうすぐ滅度する』と言うのです。ですから偽(いつわり)を言ったとしても、私を咎(とが)める人はいないでありますよ」と、釈尊は仏の『真実』と『方便』について説かれたのでした。



によらいじゆりょうほん 如来寿量品の二つの要点

(P170・4行/P120・終行)

第一の要点は、「仏の本体」をはじめて明らかにされ、その寿命が「不生不滅」であることを説かれたことです。

第二の要点は、その本仏のこの世への現われである「釈迦牟尼如来」が、「なぜ、入滅されなければならないか？」を、はっきり説明されたことです。

如来寿量品の三つの意味

(P13・1行/P9・1行)

『如来寿量品』には、三つの大切な意味があるとされています。その三つとは、
《開近顕遠(かいこん けんのん)・開迹顕本(かいしゃく けんぼん)・開権顕実(かいごん けんじつ)》

【開近顕遠(かいこん けんのん)】— 《近きを開き、遠きを顕わす》

我々から見て近くの実事を出発点とし、その奥にある一番遠くにあるものを顕わすという意味。
釈尊の悟りを通して、永遠の過去からある「法」を知ること。

【開迹顕本(かいしゃく けんぼん)】— 《迹(あと)を開き、本(もと)を顕わす》

迹仏を通して本仏を知ること。

【開権顕実(かいごん けんじつ)】— 《権(ごん)を開き、実(じつ)を顕わす》

権(仮り)を通して実(眞実)を知ること、つまり「方便」を通して「真理・眞実」を知ること。

現実の相の違い

(P34・2行/P23・4行)

人間はその本質において平等(平等相)であるということも眞実ありますけれども、現実のあらわれにおいて違い(差別相)があることもまた眞実であります。～ところが、その差別相というものは決して固定したのではなく、つねに流動しているものだということがわかってきます。
すなわち縁起によって如何ようにも変わってしまうこともありうるのです。

《愚惟のひととき ①》

庭野開祖は、現実の世界を「平等だが(平等相)、現実のあらわれにおいて違いがあることもまた眞実。その違い(差別相)は『縁起』によって如何ようにも変わってしまう」と説いています。
— このことをかみ締めてみましょう。特に『縁起』によって如何ようにも変わってしまう」とは、どのような意味を持つのか?。考えてみましょう。

一念三千は中道観の極致

(P36・3行/P23・終4行)

このように、我々人間は、どんな心の世界にも行ける可能性を、誰もが持っているのです。しかもその可能性を『平等』(平等相)に持っているのです。

ですから、目の前の『差別相』は決して固定したのではなく、その人の心の持ち方によって自由に流動させうるものなのです。

これが《十如是》の教えの神髄ともいえるべき【一念三千】であります。

たんに目の前のに見える状態を固定したものとして、平等相・差別相の両面から見るのではなく、それはどうにでも流動できるものであるという見方をしなければなりません。

これが、お釈迦さまの中道観の極致であると、私は信じています。

平等相に偏せず、差別相に偏せず、しかもその中間の立場をとるというのではなく、〈無限の流動の可能性のなかにこそ眞実がある〉という、ものの見方であります。

《**愚**のひととき ②》

庭野開祖は、『中道観の極致』は、「単にものごとの中間の立場をとるというのではなく、平等相に偏せず、差別相に偏せず、〈無限の流動の可能性のなかにこそ真実がある〉というものの見方」だと説いています。

— このことをあなたはどう受け止めますか。深めてみましょう。

『諸法如實の相を觀じ、亦不分別を行ぜざる。是れを菩薩摩訶薩の行處と名く』

(『安樂行品』二四一頁 終四行)

「**現**われる」とは「**自**覚」すること

(新しい解釈 P349・終6行)

本仏はすべてのものを生かす力なので、その生かす対象によってそれにふさわしい形をとって現れるのは当然のことです。ですから、**人間の世界に現われる時には、人間の世界にふさわしい形となって現われるのです。**

現われるということばを、浅く解釈すれば、「現われれば、誰でもそれを見ることができるではないか」という疑問がおこるでしょうが、そうではなく、**もともとちゃんと存在するものを「自覚」すること**を「現われる」といったまですぎません。すべての人間を生かしている真理であり、(本仏は)すべての人間を生かしている力である限り、我々の内側にも常に存在するものでありますから、(本仏を)我々が何らかの方法でその存在を自覚できないはずはないのです。**その自覚が、とりもなおさず「仏」をみたまつることです。**

《**愚**のひととき ③》

「(仏の存在を信じ、自覚をする)その自覚が、とりもなおさず「**仏**」をみたまつることです」と庭野開祖は説きます。

— この「**仏**をみる」。ということについて深めてみましょう。「**仏**をみる」、「**仏**がみえる」ということは、どのようなことを意味するのか。考えてみましょう。

『汝等當に如來の誠諦の語を信解すべし～世尊唯願わくは之を説きたまえ。我等當

に佛の語を信受したてまつるべし』 (二七二頁 一行～終四行)

智・慈・行がそろわなければならない

(P53・終3行/P37・3行)

- 「文殊菩薩」…智慧(智) 序品～安樂行品 (迹門)
- 「弥勒菩薩」…慈悲(慈) 從地涌出品～妙莊嚴王本事品 (本門)
- 「普賢菩薩」…実践(行) 普賢菩薩勸發品 (本門)

こうならべてみますと、『法華經』の内容の構造がよくわかります。人間が正しい、良い人間になるには、何よりもまず「**智慧**」が必要です。『無智は罪惡である』といわれるように、悪いこ

とをする人は、本当の「智慧」が無いからです。～ 本当の「智慧」というのは、この世のすべてのものごとの本質をよく見通し ～ ものごとのあいだにある複雑な関係を「正しく見る」ことのできる理智を言います。～ 「智慧」が身に付くと、智慧がまだ身につけていない人を見ると、どうしても智慧を身につけるように救ってあげずにはいられない気持ちになります。すなわち「慈悲」の心が湧いてくるのです。「慈悲の心」が湧いて来れば、おのずからそれを「行為・実践」に現わさずにはおれなくなります。

こうして「智慧・慈悲・実践」の三つがそろって完全に行われるようになった時、「仏の教え」は完成したことになります。

《息^{ゆい}惟^いのひととき ④》

『「智慧・慈悲・実践」の三つがそろったとき、仏の教えは完成する。私たちの信仰姿勢には、この『三つ』が大切である』と開祖さまは説かれます。

— では私の信仰姿勢を振り返った時、この「三つ」を具え、整っているか？ または何が不十分であるか？ 「何を」具えて行きたいか？ 振り返ってみましょう。

ほとけ ^{さんじん} 仏の三身 — ^{さんじんいつたい} 三身一体

(P66・1行/P45・終3行)

「法身・ほっしん」… 真如そのもの。ギリギリの根源の法。仏の本体。

「報身・ほうしん」… 真理・根源の法を具体化する人格的な力。阿弥陀如来など。

「応身・おんじん」… 実際に人間としてこの世に出現した仏。お釈迦さま。

これらの仏は考えの上で三つに分けられる形であり、本当は一体のものなのです。

われじつ ^{じょうぶつ} 『我實に成佛してより已來、^{このかた} ^{むりょうむへん} 無量無邊百千萬億那由他劫なり』 (二七三頁 一行)

こ ^{このかた} 『是れより來、^{われつね} 我常に此の娑婆世界に在って説法教化す。亦餘處の百千萬億那由他阿僧祇

^{くに} ^{おい} ^{しゅじょう} ^{どうり} の國に於ても衆生を導利す』 (二七四頁 一行)

ぜったい ^{そんざい} 絶対の存在

(P82・終3行/P58・終7行)

そういう無限の過去から、この世においてになるということになりますと、仏さまはまさしく絶対の存在>なのです。～ (いかに偉い人や、莫大なお金など) それらは、いつかは滅し、散じてしまうものなのです。これらは真に我々が頼りにし、依り所にすることができません。～ 無限であり絶対であればこそ、全身全霊を投げ出して信じ、頼りにし、お任せすることができるとのことです。 このことを、しっかりとわきまえていなければなりません。

ほんぞん かくりつ 本尊の確立

(P86・終4行/P61・4行 法華經の新しい解釈P372・終2行)

仏は無限の過去から常にこの娑婆世界にいる。諸仏は、そのただ一つの本仏がいろいろ違った条件のもとに違った相(すがた)をもって出現されたものです。どの仏も尊いお方には違いないのですが、そのもとをたずねれば、すべて「久遠実成の本仏釈迦牟尼如来」に帰一するのだということが、ここではっきりしたわけです。そして、我々の信仰の対象となる本尊が確立することになります。

我々の会において、「久遠実成の本仏釈迦牟尼如来」を本尊としてあがめたてまつる意義はここに立脚しており、それが最も正しい信仰であることは、経典そのものによって明白に証明されているのであります。

《急催のひととき ⑤》

「(仏は)無限であり絶対であればこそ、全身全霊を投げ出して信じ、頼りにし、お任せすることができのです。このことを、しっかりとわきまえていなければなりません」と開祖さまは説かれます。

— では私は現在(いつも)、何を頼りにし、依り所としているのでしょうか？
また、「それ」を依り所としていけば、これからもずっと「安泰」でしょうか？
みんなで考えてみましょう。

われぶつげん もつ そ しんどう しょこん りどん かん ど どころ したが
『我佛眼を以て其の信等の諸根の利鈍を觀じて、度すべき所に隨つて、～』(二七四頁 五行)

しゅじょう しょうぼう ねが とくはつくじゅう もの み
『衆生の小法を樂える徳薄垢重の者を見ては、～』(二七四頁 終四行)

ほんのう あか 煩惱は垢である

(P107・終5行/P78・5行)

垢重(くじゅう)というのは、「垢が重なり合っていっぱい付いている」ということです。垢とは「煩惱」をさします。すなわち、「煩惱は決して人間の「本質」ではなく、その表面についた「附着物」なのです。～ 常に心をよく洗っておれば、垢はたまらないのですが、それを怠っていると、いつの間にか仏性をおおい隠してしまうのです。

しか われじつ じょうぶつ このかた くおん か ごと
『然るに我實に成佛してより已來、久遠なること斯くの若し』(二七四頁 終三行)

にょらい の どころ きょうでん あるい こしん と あるい たしん と あるい こしん しめ
『如来の演ぶる所の經典は、～ 或は己身を説き、或は他身を説き、或は己身を示

あるい たしん しめ あるい こじ しめ あるい たじ しめ もろもろ ござつ どころ みな
し、或は他身を示し、或は己事を示し、或は他事を示す。諸の言説する所は皆

じつ むな
實にして虚しからず』

(二七四頁 終行)

- 「己身を説く」— 本仏(法身)について説く
- 「他身を説く」— その他の仏、燃燈仏、阿彌陀如来など(報身)について説く
- 「己身を示し」— 釈尊(応身)の身として現れる
- 「他身を示し」— その他の聖人・賢人の身として現れる
- 「己事を示し」— 仏さまの大慈・大悲の救いそのまま救いの形として現れる
- 「他事を示し」— 一見、仏さまの救いでないような形、苦・痛み・試練として現れる

くのう こうじょう ふ だい
苦悩は向上への踏み台

心の「悩みや苦しみ」は、人間らしい人間となるためのひとつの「踏み台」となるのであって、これも大いに歓迎すべきことだといわなければなりません。～ 苦しいと感ずるのは、自らの心や身体に異変が起こり、周囲とのあいだに摩擦や抵抗を生じている証拠ですから、それを素直に受けとって、ただちに心身を真理の道に引き戻す努力をしなければなりません。～ 我々の日常生活においては、「他事」の方が「己事」よりもむしろ多く経験することですから、それに処する心がけをしっかりと作っておくことが必要なのであります。

しゆい
《**愚惟のひととき** ⑥》

「(他事の方が己事よりも多いので) それに処する心がけをしっかりと作っておくことが必要」と庭野開祖は説きます。— では、この「心がけ」とはいったいどのような「心がけ」をすることなのか? 考えてみましょう。

によらい によじつ さんがい そう ちけん しょうじ も たい も しゅつ またざいせおよ
『如来は如實に三界の相を知見す。生死の若しは退、若しは出 あることなく、亦在世及

めつど もの
び滅度の者なし』 (二七五頁 三行)

「生・死・退・出」とは一「生死」すべての変化。「退出」現象の消滅。(P124・6行/P88・6行)

「じつ あら こ あら によ あら い あら さんがい さんがい み ごと
『實に非ず、虚に非ず、如に非ず、異に非ず、三界の三界を見るが如くならず』

(二七五頁 五行)

「實に非ず 虚に非ず」とは一「實」物事が現実にそこにあると見ること。

「虚」物事がそこに無いと見ること。(P128・1行/P91・1行)

「如に非ず 異に非ず」とは一「如」常住ということ。「異」変化すること。

(P130・1行/P92・5行)

「三界の三界を見るが如くにならず」とは一「三界」人間が住んでいる世界。

三界に住んでいる人間が、狭い心や濁った眼で、自分たちの住んでいる三界を見ているような見方と違って、如来は透徹した眼で、この世界の本当のすがたを見ている。

(P131・終5行/P93・4行)

われわれ凡夫は、現象のうえでしか物事を見ないというくせがあるために、ともすれば、その仏さまの大慈・大悲を見失って、驚いたり、悲しんだり絶望したりするのです。～ 澄み切った心・実相を見る眼をもって、「自分は仏さまの大慈大悲に生かされているのだ」ということを信じ、悟りきってしまわねばなりません。～ そうでなくては、いくら万巻の経典を読んでも、何にもなりはしません。お釈迦さまの折角の教えが無に帰してしまうのです。

(P125・終2行/P89・5行)

この世のすべての物事は、「縁起の法則」に従って存在しているのであって～ 現実には『ある』ことは事実であるけれども、「凡夫が眼で見るとおりに『ある』」と決め付けることは間違いだということなのです。～ ぶつうの人間は「目の前に見えることしか『実在』とは思わず、それにとらわれて心を乱してしまうのです。

(P128・終3行/P91・8行)

《愚惟のひととき ⑦》

われわれ凡夫は、現象のうえでしか物事を見ないというくせがあるために、「苦」を生むのだ。この世のすべての物事は、「縁起の法則」に従って存在しているのである。大切なことは、澄み切った心で「自分は仏さまの大慈大悲に生かされているのだ」ということを信じることだと、庭野開祖は説きます。

—— この庭野開祖の教えをあなたは、「どのように受け止めますか？」

『如来明かに見て錯謬あることなし。諸の衆生、種種の性・種種の欲・種種の

行・種種の憶想・分別あるを以ての故に、諸の善根を生ぜしめんと欲して、～

種種に法を説く。所作の佛事未だ曾て暫くも廃せず』 (二七五頁 六行)

『我成佛してより已来甚だ大いに久遠なり。壽命無量阿僧祇劫、常住にして滅せず』 (二七五頁 終四行)

《愚惟のひととき ⑧》

「如来は実相を見極めていたので、見誤ることはない」。「それぞれの人の機根を知り分けているので、様々な形を通して教化する」。「しかもその教化・導きは、一時(いつとき)として休むことはなく、常に人々と共に住している」と『寿量品』では説かれています。

—— このことをあなたは、「どのように受け止めているか？」 深めてみましょう。

『若し佛久しく世に住せば、薄徳の人は善根を種えず。貧窮下賤にして五欲に貪著し、

憶想妄見の網の中に入りなん。～ 諸佛の出世には値遇すべきこと難し』 (二七六頁 一行)

ほとけ みもの
仏を見ざる者

(P172・4行/P122・2行)

徳の薄い人は、そういうお方(仏さま)のご在世に巡り合えても、その教えに触れることができません。～いくら仏の教えを聞かされても、心がそれに向かなければ、**仏さまは見えない**のです。～久遠実成の仏さまは、いつまでもどこでも、我々と一緒にいてくださっているのですが、**我々の心が仏さまを見たてまつらなければ、その救いが現われるはずがありません。**～仏の教えは、あくまでも我々のほうから求めて行かなければならないのです。求める心がなければ、目の前で教えが説かれていても、耳に入りません。耳に入ったとしても、胸にしみ込んではいけません。～**「求める努力は、あくまでも人間自身がしなければならぬ」**—これが釈迦さまのお教え下さった大眼目のひとつです。

れんぼかつごう
恋慕渴仰

(P176・終3行/P125・5行)

我々は、こころやすく仏さまのお名前を口にしていますが、静かに考えてみる時、この末法の世において仏さまに会いたてまつることは、**実に大変なこと**なのです。～この世で仏さまにお会いするなど、並大抵のことではできません。

《息惟のひととき ⑨》

「仏さまにお会いすることは実に大変なことであり、並大抵のことではできない」「徳を積み、『仏を見たい』と思わなければ、仏を見ることができないし、『救い』は現われない。**求める努力は、あくまでもその人自身がしなければならぬ**(本人自身が求める努力をしなければ仏を見る)ことができない」と開祖さまは説きます。——私の信仰姿勢を振り返り、この庭野開祖の教えを、あなたはどのように受け止めますか？ かみ締めてみましょう。

ろういじし たと
良医治子の譬え

(P182・6行/P129・5行)

『**速かに苦悩を除いて復衆の患なげんと**』 (二七七頁 終四行)

『**此の子慙むべし**』 (二七八頁 二行)

『**常に悲感を懐いて心遂に醒悟し**』 (二七八頁 終三行)

《息惟のふいかえり まとめ》

今日の『如来寿量品 第十六(前半)』の学びを通して、何を学び取ったか？
(または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか?) かみ締めてみましょう。

合 掌